

## 第2部 冤罪をつくる構造～警察官・検察官・裁判官、そしてメディア

### 私を裁いた判事たちの「こじつけの論理」

岩川 徹さん：旧鷹巣町長

検察の主張した起訴事実は、「平成21年2月16日、私が北秋田市内のコンビニの駐車場に二階堂さんと呼び出し、車でやって来た二階堂さんを私が運転する車内に招き入れ、15万円を渡して投票依頼をした」です。

でも、この日は我が家の近所に住む細田英美さんが私の車を運転してくれて、私達は夜まで一緒でした。几帳面な細田さんは当日の出来事を日記に書き残し、証人として法廷で証言し、証拠の日記を提出しました。二階堂供述調書が警察の作文であることを示す最強の反証でした。しかし馬場純夫裁判官の一審判決は細田証言を、こんな風に葬りました。

「確かに、細田は公判廷において同趣旨の証言を行い、また、この証言は同人の手帳の記載に裏付けられており……」  
 「仮に細田が運転手として同行したとしても、そのことと細田が運転席から降りたことがなく、被告人と二階堂が自動車内で2人きりになったことはないとの証言が信用できるかは別問題」  
 「二階堂の捜査段階での供述の信用性を覆すほどの信用性を有するとはいえない」

難解ですが通訳すれば、「細田がトイレかなんかで車を離れたすきに、二階堂が私の車に乗り込んできて、私からカネを受け取った」。裁判官は、こんな粗雑な論法で私を有罪にしたのです。

もうひとつ馬場判決の例をあげます。検察側最重要証人の澤藤孝志さん（二階堂さんとは無二の親友でありながら、親友を警察に売った人物）が、自身の供述調書について、法廷でこう証言しました。

澤藤「冗談ではありません。まず、その調書、だめですよ。私、一つも確認しないで、目も通してないし、よく作った。そんな、やめましょう。これ話にならない」  
 「（二階堂さんからの電話通話記録を見せられたか、と弁護側から聴かれて）ありません。それ、全然ないですよ、一回も。空想も甚だしいよ、嫌なこと。そんな作り事はやめてください」

検察側証人が、自身の供述調書を否定した前代未聞の証言でした。でも判決はこうなりました。

「同人が脳梗塞のために半身の自由を欠くなどの健康状態にあることからすれば、公判廷での証言が相当な負担となっていることも明らかである。……澤藤の供述調書については、特に信用すべき状況において作成されたものとして、証拠として採用されるべきものといえる」

法廷証言は脳梗塞が原因のたわごとで信用ならない、と言うのです。調書をとられたとき、彼はすでに脳梗塞で半身不随でした。なのに調書は有効で法廷証言は無効。私から見れば「調書も法廷証言も無効」で、裁判はこの日で空中分解でしょう。

さらに、この馬場裁判官は、二階堂さん自身の一審法廷でこんな尋問をしました。(この時期、私は拘置所に拘留されていて、後日、拘置所で速記録を読んだ)

裁判官「そのアルバイトというのは、やっぱり単なるアルバイトじゃないんじゃないかというふうに、普通、思うような気がするんだけどね」

「あなた、純粋に車を運転するだけのアルバイトを頼まれたつもりなのになんて言うような趣旨にも聞こえるけど」

「選挙について何か手伝いをしてほしいんだなという趣旨がそこに含まれてると言うふうに、普通は思えるような気がするんだけど」

「それは、単に車を運転してくださいとか、そういう趣旨以上のことを含んでいるというふうに思うほうが普通かなと思うんだけど」

「そういう趣旨が含まれているというふうに見るほうが自然のような気がするんだけどね」。

それに対して二階堂さんは答えました。

二階堂「考えればそういうふうにも感じるけど。考えてみますとね」

裁判官「今にして考えるとということかね」

二階堂「当初はそういう気持ちは全く持っていません」

裁判官「あなたとしては、そういうことなの」

二階堂「はい」

裁判官「選挙でお手伝いしてくださいという趣旨でお金を渡してきてるんだなというふうには思わなかったの」

二階堂「うーん、ただ、そんなに強く深く考えないですな」

裁判官「もっときちんと深く考えればよかったということになるのかね、そうすると」

これは裁判官による明白な誘導尋問です。答弁の強要です。検察官であろうと弁護人であろうと、誘導尋問は禁じ手。裁判官は、それを厳しくたしなめる立場のはずです。この日の二階堂さんは、裁判官、国選弁護人、検察官の三方からパンチをあびました。傍聴席には、記者も傍聴人も、ほとんどいなかったそうです。

はっきり言って、日本の検察官と裁判官の質はサイテーです。

二審の卯木誠裁判長の論法はもっと乱暴でしたが、ここには書ききれません。ぜひ大熊一夫著「つくりごと」を読んでください。